

# 「東日本大震災」の脱構築：チリ辺境にある 3.11の津波被災地から

内尾 太一

## 1. 遠地津波という越境する災害

本研究は、いずれも地震大国として知られる日本とチリの間で発生した2つの津波災害に注目する。ひとつは、1960年5月22日に南米チリ沖を震源とするバルディビア地震の津波、もうひとつは、2011年3月11日に日本の三陸沖で発生した東北地方太平洋沖地震の津波である。いずれも人類史に残る巨大地震であり、前者のモーメントマグニチュード<sup>1</sup>はMw 9.5(観測史上1位)、後者はMw 9.0(4位)となっている。バルディビア地震では、チリ南部の諸都市を壊滅させ、東北地方太平洋沖地震では、「東日本大震災」という未曾有の事態を引き起こした。

ただし、本研究が目を向けるのは、それとは逆に太平洋の大海原へと拡散していく津波の行方である。例えば、バルディビア地震の場合、その津波はチリから日本にまで襲来した。この災害は、日本国内では「チリ地震津波」として語られている。このような、遠方にある震源地からの津波を、「遠地津波」という。そして、この遠地津波は双方向的なものである。実のところ、「東日本大震災」の引き金となった東北太平洋沖地震も、遠地津波となって、チリ沿岸部に様々な被害をもたらしている。チリ国内では2m以上の津波を、北部から中部にかけて4箇所を観測している〔気象庁 2011:7〕。

遠地津波に関する包括的な先行研究には、ブライアン・アトウォーターや六角聰子らによる *The Orphan Tsunami of 1700* がある。元禄13年(1700年)1月27日から28日にかけての夜、日本の太平洋沿岸部に遠地津波が押し寄せた。それは、江戸時代の人々にとって、全く想定外の災害であった。なぜなら、当時、地震と津波は、親から子が生まれてくるように、不可分のものだと考えられていたからである。実のところ、その「親」となる地震の震源は、8,000 km 離れた北米大陸の太平洋沿岸地域にあった。推定マグニチュード M 8.7~9.2 のこの大地震は、後に「カスケード地

震」と名付けられたが、その発生はアメリカ合衆国建国以前の出来事である。震源近海の地域では文字による記録は残されていなかった。地質学や考古学的アプローチでは、その沿岸地域の堆積物などから発生年までは特定できても、それ以上の正確な日付は不明のままであった。そこで手がかりとなったのが、その遠地津波で被災した日本側の当時の史料である。アトウォーターらは、日本においては歴史学的アプローチによって、現在の岩手県や茨城県、静岡県、和歌山県に残された複数の古文書の検証を行った。そして、その情報を基に、津波到達の時刻から逆算する形で、かなり正確な地震発生日時を割り出すことに成功している。また、彼らは、こうした遠地津波のメカニズムの説明において、1960年のバルディビア地震/チリ地震津波や、2004年のスマトラ島沖地震/インド洋大津波のような近年の事例にも言及している〔Atwater et al 2005〕。

そして、本研究との関連において、上記の学際的研究が明らかにしていることのひとつは、災害の越境性だといえる。津波災害の多くは、海底でプレートが重なり合う地球の構造に起因するものである。その中でも人工的な領海や国境を易々と超えていく遠地津波は、国民国家の枠組みに収まることのない原初的な地球システムの所在を示している。しかし、現代世界において、大規模自然災害は、国単位の出来事として区分される傾向にあり、そのことが、我々の災害の全体像を理解する妨げになっていると考える。「東日本大震災」も例外ではない。本研究が問うのは、こうした災害のナショナルな構築のされ方である。

それでは、本項の終わりに本論文の構成について説明しておく。まず、国内の調査地として、宮城県南三陸町を紹介する。この地域は、合併前の志津川町時代に、1960年のチリ地震津波によって大きな被害を受けたことで知られている。続いて、2011年3月11日以降の南三陸町とチリとの交流に焦点をあてる。ここまでが、本研究の主要部分を担うチリでの調査の背景を成す。

<sup>1</sup> 地震発生時の地下の岩盤のずれの規模(ずれ動いた部分の面積×ずれた量×岩石の硬さ)をもとにして計算したマグニチュードを、モーメントマグニチュード(Mw)という。普通のマグニチュード(M)は地震計で観測される波の振幅から計算されるが、規模の大きな地震になると岩盤のずれの規模を正確に表すことができない。これに対してモーメントマグニチュードは物理的な意味が明確で、大きな地震に対しても有効となる〔気象庁 2016〕。

前半の内容を踏まえ、ここからは、2011年の東北地方太平洋沖地震の津波によるチリ側の被災地に視点をうつす。アタカマ州の漁村プエルトピエホでは、多数の家屋が流失している。津波当日の現地の様子とその後の復興過程を、具体的に記すことで、日本社会の内部から見過ごされていた災害の多様な現実を浮かび上がらせる。

最後に、結論部分では、「東日本大震災」という日本全体を揺るがした大災害を、あえて太平洋の対岸から捉え直すことの意義について論じる。そして、チリ辺境にある被災地からの視点で、これまで「東日本大震災」を規定してきた構造を相対化し、災害のナショナリティを脱構築することを試みる。

## 2. バルディビア地震（1960）

日本の東北地方太平洋側はリアス海岸が連なり、歴史的にも地震と津波による大災害が繰り返されてきた。その一角をなす南三陸町は、全国的な「平成の大合併」の流れの中で、2005年に志津川町と歌津町が合併して誕生した町である。

この地域に、1960年5月24日早朝、遙か南半球より遠地津波が押し寄せた。この災害は、同年5月22日午後7時11分頃、チリ南部近海でMw 9.5のバルディビア地震が発生したことを端にする<sup>2</sup>。それから約22時間半後、その震源から約17,000 km離れた日本の太平洋沿岸部に津波の第一波が到達した。遠地津波の特徴通り、日本で被災した人々は、事前の地震を感じる事がなかった。

結果的に、志津川町では41名（全国で142名）の死者を出す惨事となった。市街地のほとんどが水につき、田畑をはじめ、漁業関連施設、道路橋梁等の被害も甚大であった。負傷者500名、家屋の被害は流出312戸、倒壊653戸、半壊364戸となっている〔志津川町1989：298, 299〕<sup>3</sup>。

しかし、このチリ地震津波は、志津川町にとって単

なる禍いで終わらなかった。発生から30年後の1990年、当時の駐日チリ大使が同町を訪れ、友好のメッセージを贈ったことから、チリとの交流が始まったのである。「志津川町の皆様へ」で始まるそのメッセージは、以下のようなものである。

30年前、チリ国南部海岸地帯を襲い、貴町にも、津波の大きな被害をもたらした悲しむべき災害を記念されることに、チリ国民は、深い共感を覚えます。この記念碑建立は、両国民の友好と相互理解をより深め、そして、将来にわたり、両国間の絆を一層強めていく証となるでしょう。チリ国民は、この長い歴史を持ち、かつ、友愛に満ちた両国の関係に、深い愛着の念を抱くものです。〔志津川町1990：72〕

このメッセージの後に、「駐日チリ大使館」という署名と、遠地津波が襲来した丁度30年後を意味する「1990年5月24日」という日付が明記されている。また、これと同じ文言は、町内市街地の中で海に面した松原公園に設置されたコンドル（チリの国鳥）の記念碑にも刻まれた。さらにその翌年1991年に、そのコンドルの碑の隣に、チリ領イースター島の誇る巨石文化にちなんで、チリ本土の石でつくられたモアイ像が寄贈された。

この時点で、志津川町ほど、日本国内でチリと関係の深い地方自治体は他になかったであろう<sup>4</sup>。その後も、「モアイの町づくり推進協議会」も立ち上げられ、町内数カ所にモアイのレプリカ像が置かれたり、マンホールにもモアイのイラストが描かれたりするようになった。

南三陸町となってからの目立った動きとしては、2010年に、宮城県立志津川高校の情報ビジネス科が、地域活性化のための「南三陸モアイ化計画」をスタートさせている。モアイ像を活用した商品開発や、防災意識の向上、チリとのさらなる国際交流を目的としていた。

<sup>2</sup> アメリカ地質研究所（USGS: United States Geological Survey）によると、バルディビア地震のチリでの被害は、南部の主要都市を中心に、死者1,655人、負傷者約3,000人、家を失った人約200万人、被災地域における被害額550万ドルとなっている〔USGS 2012〕。チリ側の地震や津波に関するデータや被災状況をまとめた初期の研究として、広野卓蔵やジョージ・ハウスナーの論文がある。チリ沿岸部の津波に関する記述として、前者では、最も津波の激しかった南部約550 kmの海岸で、約10 mの高さを含む3回の大波が観測されたとある〔広野1961：23〕。また、後者では、地震発生から15～30分後に数時間に渡って各地で6 m（20 feet）以上の津波があったとされている〔Housner 1963：219〕。

<sup>3</sup> 後に合併する隣の歌津町では、3.1 mの波高を測定したものの、津波による人的被害はなかった。しかし、第一波から三波まで沿岸部を走る県道を越えて町内に浸水した。田畑や建物、船舶、かき処理場など、様々な被害が出ている〔歌津町1986：1112～1116〕。

<sup>4</sup> 災害関連以外にも、志津川町はチリとの経済的な結びつきもあったとされる。この町は、1970年代に、日魯漁業（現在のマルハニチロ）の指導を受け、全国に先駆けてギンザケの海面養殖に取り組んだ地域でもある。そこで発展した技術はJICAを通じてチリに伝えられ、サケ輸出大国として成長するまでになった〔細野2010〕。そして、この国際協力プロジェクトの成果は、一部、志津川町にも還元されたという。チリから輸入したサケを扱うことで、同町とその周辺地域は、養殖業だけでなく、水産加工業でも栄えるようになった〔名波2011：26〕。

チリ地震津波は、町の防災にも大きな影響を与えた。政府による本格的な津波対策事業が行われ、志津川湾の場合は、T.P.(Tokyo Peil:東京湾平均海面) +0 m から+4.6 m まで高低の幅のあった防潮堤が、このときを境に、T.P.+3.3 m から+4.6 m までと底上げされている [運輸省第二湾岸建設局 1978: 76, 77, 81]。町内には、「地震が来たら津波の用心」という石碑が、1933年の昭和三陸地震後に建てられていたが、チリ地震津波以降は、「異常な引き潮、津波の用心」という教訓も加えられることとなった。

さらに、毎年5月24日のチリ地震津波の日には防災訓練も行われていた。丁度50年目となる2010年には町民ら約5,000人が参加している [河北新報 2010]。「東日本大震災」発生の約10ヵ月前のことである。

### 3. 東北地方太平洋沖地震 (2011)

2011年3月11日午後2時46分、東北地方太平洋沖で、Mw 9.0の大地震が発生した。南三陸町で観測されたのは、震度6弱の激震であった。続いて、午後3時25分前後に大津波が襲来した。町内の浸水深は、志津川地区で13.8 m~23.9 m、歌津地区で12.2 m~23.4 mであった [南三陸町 2012: 19]。宮城県の報告によると、南三陸町の人的被害は、死亡者620名、行方不明者212名、住家被害は全壊3,143棟、半壊178棟となっている [宮城県 2015]。海に面した松原公園は、モアイ像もろとも真っ先に海水に飲み込まれた。そのモアイ像は後に、頭部と胴体が離れた姿で瓦礫の中から発見された。

筆者自身が南三陸町に関わるようになったのは、この震災以降のことである。2011年12月からこの地域で被災地支援を通じたフィールドワークを行ってきた。そして、本研究では、南三陸町とチリとの関係を焦点を当て、復興過程における国際協力や国際交流について記していきたい。

まず、未曾有の大災害に見舞われた日本に対して、海外からは多くの緊急援助が寄せられた。外務省の「諸外国等からの物資支援・寄付金一覧」によると、チリから受け入れた最初の物資は、2011年4月26日の「米100 kg (日本で購入したもの)」となっている。そして、その米の受け入れ場所が、「宮城県南三陸町」と具体的に明記されている点は特筆に値する [外務省 2012]。

チリからの支援は緊急時に限ったものではなかった。2012年3月末にセバスティアン・ピニェラ大統領 (当

時) が来日し、日智首脳会談後に、南三陸町を慰問に訪れている。その際、志津川高校にも足を運び、震災前からモアイによる町づくりに取り組んでいた生徒らと交流をした。1991年にチリ政府が寄贈したモアイ像の頭部は、同校の敷地内に移設されており、その場でピニェラ大統領は新しいモアイ像を贈る約束をした [朝日新聞 2012]。

かくして、南三陸町、駐日チリ大使館、日智経済委員会、両国の複数の民間企業の関係者で構成される「モアイプロジェクト実行委員会」が発足した。このプロジェクトの経緯については、同実行委員会がまとめた『モアイの絆』に詳しく書かれている。かつての1960年のチリ地震津波への言及はもちろんのこと、クレーンを扱う日本企業がイースター島のモアイの修復に携わったことや、その背景もあって、今回日本のためにこれまで門外不出だった同島内の石から新たなモアイが造られたことなど、様々な逸話が紹介されている [モアイ実行委員会 2013]。また、チリの出版社からも、アナ・マリア・アレドンドによる絵本 *Un Moai Para Japón* が発行された。イースター島に暮らす少年テ・ポウを主人公に、そのモアイ像が島を出発するまでの物語が描かれている。 [Arredondo 2013]。

そして、完成した高さ3メートル、重さ2トンのモアイ像は、2013年5月に南三陸町に寄贈された。以来、このモアイ像は南三陸町の新たなシンボルとして定着している。町民がチリに対して一層友好的なイメージを抱くようになったことはもちろんのこと、観光客向けの関連グッズも多数発売され、実質的な経済復興にも一役買っている。

さらに、町民とチリの人々の交流事業も確実に活発化している。2012年には、コンステイトゥション市<sup>5</sup>のガブリエラ・ミストラル校と志津川高校の生徒が、復興への想いを込めた詩や物語を創作し、互いに贈り合った。それぞれの作品にはメロディがつけられ、2013年3月12日の南三陸町でのコンサートなど、両国における災害の追悼イベントで披露された [国際交流基金 2013]。また、同じく2013年3月に、チリ側の招待で、志津川高校の生徒3名と引率教員1名が、19日間の研修旅行に参加している。その際、彼らはチリ本土だけでなくイースター島にも訪れ、南三陸町のために造られたモアイ像に対する感謝の気持ちを現地の人々に伝えたという [外務省 2014: 74]。

<sup>5</sup> チリ中部マウレ州の都市。2010年2月27日に発生したMw 8.8のチリ地震で大きな被害を受けた。同市では、約4分間揺れが続き、その後の津波 (推定15 mで104人が犠牲となった [国際交流基金 2013])。本研究では、詳細について紹介できなかったが、実はこの地震も遠地津波を引き起こし、日本に影響を与えている。人命の損失こそ避けられたものの、三陸沿岸部の漁業には大きな被害をもたらした。

#### 4. 地球の裏の「3.11」

ここまで、災害を契機に深まる両国の関係を見てきた。筆者も、南三陸町の人々の話を聴いていて、チリ地震津波のことはよく耳にしていた。それでも、東北地方太平洋沖地震を、遠地津波の発生源として捉えるようになったのは比較的最近のことである。まずはインターネットでの情報収集を始め、チリ沿岸部の複数の地域でも、現地時間の2011年3月11日から12日にかけての夜間に、日本からの津波が押し寄せていることを知った<sup>6</sup>。

しかし、そこから得られる情報は当然ごく限られたものである。さらに詳細を明らかにするためには、実際にその被災地を訪ねる必要があった。そこで、文化人類学の基本的なアプローチでもある滞在型のフィールド調査の計画を立てた。今回、主要な調査地となったのは、プエルトビエホ（古い港、という意味）というチリ北部アタカマ州沿岸にある小さな集落である。事前の調べにより、ここで150～200軒の家が被害を受けたという情報を得ていた。

そして、現地での調査は、麗澤大学の平成27年度特別研究助成により、2015年9月と2016年2月に行われた。第1回目の現地訪問は、予備調査に位置付けられる。首都サンティアゴでチリ人のドライバー兼通訳を雇い、車で丸一日かけてまずアタカマ州の州都コピアポへと辿り着いた。この二都市間は、距離にして約800km離れており、東京から青森までよりも若干遠い。翌日、そこからさらに西へ約80km移動した。アタカマ砂漠を有するこの州は、世界でも最も乾燥した地域のひとつである<sup>8</sup>。プエルトビエホへと続く一本道も、その周囲は、砂と石と僅かな植物の荒野が広がるばかりであった。途中にはバス停も店も何もない。そんな隔絶された場所が、此度の遠地津波によるチリ国内最大級の被災地となった。

プエルトビエホの入り口を示す看板を横切ると、すぐ右手には開けた砂浜があり、その先には太平洋が広がっていた。砂浜の上には、軽量の木材やトタンでつ

くられた簡素な家屋が数百軒もひしめき合っている。決して豊かな人々が住んでいるようには見えなかった。しかも、その軒数に対して人口が圧倒的に少ない。「ゴーストタウン」と見紛うほどであった。

数少ない通行人を呼び止め、尋ねてみるとすぐにその理由は明らかとなった。このプエルトビエホは、小さな漁村であると同時に、近隣都市に暮らすチリ人にとっての避暑地だということである。空き家だと思っていたのは、彼らの「別荘」だった。南半球の夏は、主に12月から2月の間である。このときに、数千もの人々がコピアポをはじめ内陸部から1～2ヶ月間の夏の休暇を過ごしにやってくる。つまり、初めて訪れた2015年9月上旬はまさに「オフシーズン」だったということである。それ以外の時期の住民の数は100人程度で、そのほとんどが漁師だという。

この疑問が解消したところで、津波の痕跡を探すために浜辺を歩いた。するとすぐに、建物のコンクリートの基礎部分や床のタイルのみが残された箇所が幾つも見つかった（写真①）。これと同じものを、かつて筆者は三陸沿岸の被災地で数多くみていた。日本の場合は、復興過程の進展とともに、その多くが重機で解体され更地となった。そして同時に、震災の記憶を後世に伝える目的で、意図的に遺構を保存する取り組みも行われている。他方、この太平洋の対岸にあるチリの



写真①（筆者撮影：2015年9月8日）

<sup>6</sup> 例えば、動画投稿サイト Youtube で、「Tsunami, Chile, Japón」といった検索キーワードを打ち込むと、現地メディアや個人がアップロードした動画を幾つかすぐに見つけることができる。そこでは、北部の最大都市アントファガスタで津波警報が鳴り響く様子や、中部の港湾都市キンポで海水が砂浜を満たし海沿いの道路まで迫っている様子、中南部の湾奥の町ディチャトでも町内への浸水が確認された。

<sup>7</sup> 2010年8月に落盤事故が発生したサンホセ鉱山は、このコピアポ近郊にある。33人が閉じ込められ、69日後に全員が無事に救出されたことは、日本でも注目を浴びた [名波 2011]。

<sup>8</sup> アタカマ砂漠においては、近年、オーストラリアの人類学者サリー・バビッジが、先住民アタカメーニョ族の水資源の利用に関する調査を行っている。彼女は、貴重な水を乾燥した大地に捧げる儀礼の詳述などを通して、現地の人々の資源に対する倫理観を描き出している [Babidge 2016]。また、デューク大学教授も務めたチリ人の作家アリエル・ドルフマンは、アタカマ州を含むチリ北部の砂漠地帯 Norte Grande に関する紀行文を記している。そこでは、不毛な大地に点在する天体観測所や硝石鉱山、行方不明者の墓地などの情景とともに、彼自身の回想やチリ社会への洞察が綴られている [Dorfman 2004]。

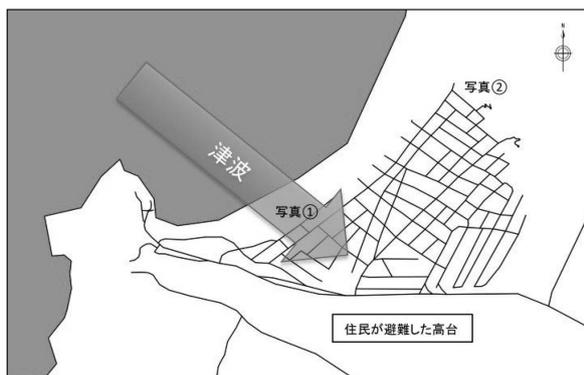
被災地では、津波の痕跡がそのままに放置されていた。それがむしろ、筆者の目には津波の生々しい爪痕として映った。また、その他にも、全体が塩水で錆び付いた車も1台打ち捨てられていた。

さらに、短時間ながらも、プエルトピエホの住民に津波が来た日の話を聞くこともできた。現地時間の2011年3月11日の夕方6時頃、住民の避難と漁船の保護のために、チリの海軍と警察がクレーンやトラックを引き連れてやってきたという。そして、3月12日午前3時過ぎ、最大4mの津波が襲来した。「この地域唯一の発電施設が波に飲まれた瞬間、真っ暗な夜へと変わった」、「飛行機同士が空中で衝突したような大きな音がした」など、彼らは避難した高台からみた津波の様子について語ってくれた。幸いにして犠牲者はいなかった。

ところで、このとき日本の時間は、2011年3月12日の午後3時過ぎである。つまり、チリに遠く津波が押し寄せたのは、福島第1原発1号機で最初に爆発音が発生した時刻（15時36分）とほぼ同時ということになる。このように表現すれば、東北地方太平洋沖地震の被害がいかに同時多発的かつ国際的なものであったが理解できる。

そして、このときのドライバー兼通訳を伴った日帰りの予備調査では、津波の痕跡を辿り、住民の証言を得る以外に、もうひとつの目的があった。次に単身でプエルトピエホを訪れる際に、数日間滞在できる受け入れ先を見つけることである。この場所に、個々の別荘はあっても、観光客用の宿泊施設はない。幸運にも、津波の体験を話してくれた小柄で恰幅のよい初老の女性が協力してくれることになった。彼女の名前はミリアムといい、現地で一人暮らしをしながら漁師向けに日用品店を営んでいる。道路を挟んで店の反対側にある小屋を利用させてくれるという。こうして筆者は、初めてのチリの被災地での調査を終え、日本への帰途についた。

2度目の調査は、およそ半年後の2016年の2月後



住民の証言を反映したプエルトピエホの地図  
(OpenStreetMapを基に筆者作成。写真②は後掲)

半に実施された。主な目的は、津波当日に加えてその復興過程についても詳しい聞き取りを行うことと、人で賑わう夏場のプエルトピエホを観察することであった。

日本から飛行機や夜行バスを乗り継ぎ、3日かけて現地を再訪すると、そこには前回と全く異なる光景が広がっていた。実際に目にするまでは半信半疑であったが、本当に老若男女を問わず大勢の人々がいたのである。海での遊泳、サーフィンやジェットスキー、砂浜でのボール遊び、犬を連れての散歩など、皆一様に夏らしい休暇の過ごし方をしていて、ミリアムの店以外の日用品店やレストランも何軒か営業中だった。公共の交通機関はないと思っていたが、臨時の直行バスも州都コピアポから1日に数本運行していた。

このときの筆者の滞在期間は9日間である。単独調査では言語的な壁もあり、聞き取りがスムーズにいったとは言い難い。それでも前回の日帰りでの調査と異なり、繰り返し顔を合わせる中で、より詳細な質問をすることが可能となった。

例えば、筆者の受け入れ先を用意してくれたミリアムは、自身のライフストーリーも含めてプエルトピエホや日本からの津波のことを語ってくれた。彼女は、元々、コピアポの学校で清掃員として働いていたが、持病のリウマチが悪化したため55歳で退職することになり、2006年からこの地に引っ越してきたという。以来、店の収入や年金で生活をしている。離婚した夫との間に、2人の息子がいて、いずれもアタカマ州内の鉱山で働いている。2011年3月11日は夜9時頃に、警察官や軍人に促され、他の住民とともに車で高台まで避難した。そのときの持ち物は、財布、水、持病の薬、懐中電灯のみである。そのまま一晩を外で過ごし、翌朝、瓦礫と海水で覆われたプエルトピエホを目の当たりにした。彼女の家の中までは浸水を免れたが、一段低いところにある家畜小屋は津波で流され、ニワトリとガチョウ、そしてペットの犬を失った。この地域が復興までに要した時間は1~2年だという。現在では、津波が流れ込んだという区域にまた別のバラックが建てられている。

また、前年9月の訪問時にも話を聞かせてくれた地元漁師とも再会することができた。そのひとりペドロは、筆者を自宅に招き入れ、新鮮な魚とラム酒を振舞ってくれた。上背こそないが屈強でよく日に焼けたこの男性は、17歳の頃から37年間プエルトピエホで漁をしている。アナゴ、シタビラメ、マハタなどが獲れるという。それだけ長く住んでも彼自身、津波を体験したのは2011年が初めてのことだった。ミリアム同様、高台へと避難したのは午後9時頃である。砂糖、水、薬、魚の缶詰を持ち、コートと羽織って愛犬と一緒に家を出た。第一波がやってきたのが午前3時頃で、

最後の大きな津波は午前7時頃だった。ただし、この津波で被害を受けたのは、ほとんどが内陸部に暮らす別荘の所有者であったという。翌朝には、外から大勢の人々が現地に駆けつけ、被災状況を高台から眺めていた。その後、津波の跡地の瓦礫撤去作業にあたったのは、プエルトビエホを行政上の管理下に置くアタカマ州のカルデラ市だった。

2度目の調査での大きな進展は、ミリアムやペドロのような地元住民だけでなく、夏場の滞在者にもインタビューができたことである。到着翌日に、筆者が砂浜を歩いていると、“Surf School”の看板を掲げた一軒家があったので覗いてみた。住人と思しき中年男性と目が合い、日本から来た研究者だと自己紹介すると、中に入るように促された。今回の滞在期間を通じて親交が深まったボニージャ家の人々との出会いである。コピアボ在住のこの家族は、父、母、3人の息子（28歳、20歳、15歳）で、毎年夏をプエルトビエホで過ごしている。長男ダニエルは、仕事で2010年のハイチ大地震の復興に携わったこともあるという。2011年3月12日に津波襲来の報を受けた彼らは、すぐこの別荘の様子を見にきていた。彼らが家を建てていた箇所は被害を免れていたが、津波が直撃した範囲に続く道は警察に封鎖されていた。そのときの海は、波が高く、茶色に濁り、家の残骸を多数浮かんでいた。この突然の災難によって、プエルトビエホから足が遠くのものもいたが、回収された廃材の一部を再利用して家を立て直すものもいたという。

ボニージャ家の息子3人がプエルトビエホとその周辺を案内してくれるようになると、雪だるま式に情報提供者も増えていった。インタビューの際に、長男ダニエルが必要に応じて英語で補足してくれたことも大きな助けとなった。本研究で紹介しておきたいのはカスティージョ家の被災体験である。彼らも普段はコピアボに住み、プエルトビエホでは夏季限定で商店を開いている。ミリアムの店より広く、品揃えが豊富である。基本的な食料、飲料の他、浮き輪やゴーグルなどのレジャーグッズや酒類も取り揃えている。6人家族で、店主の父ルイスと妻以外に、4人の娘が交代で店番をしている。2011年の日本からの遠地津波で、彼らの別荘を兼ねた2階建てのこの商店は、大きな被害を受けた。大量の海水とともに手前の家の瓦礫が突っ込み、半壊状態となったという。商いの場だった1階部分の損傷は激しく、そのことは彼らを大きく落胆させた。店の再建には、300万チリペソ（約50万円）の費用がかかり、8ヶ月を要した。しかし、公的な援

助は何も得られなかった。

上記のような人々の語りを集めながらプエルトビエホを歩き回っていると、徐々にこの地域の性質と被災の特徴が浮かび上がってきた。そのキーワードが、“*toma*”である。英語の“take”にあたる「取る、食べる」を意味するスペイン語の動詞“*tomar*”の派生語だと考えられる。チリにおいて *toma* は、場所の種類を指すスラングとして用いられ、やや固い表現だが「不法占拠区」と訳すことができよう。砂浜のような開けた土地に、居住権をもたない第三者が無許可で家を建てることで *toma* は出来上がる（写真②）。筆者自身、プエルトビエホ滞在中にこの言葉を何度も耳にした。では誰が真の地権者なのかと尋ねると、人によっては国有地だといい、また別の人は、昔から複数の個人が権利を主張しているため有耶無耶になっているのだといい、その辺りは判然としない<sup>9</sup>。そして、こうした状態の場所が、チリの沿岸部には複数あるという。ある滞在者いわく、*toma* は「庶民のリゾート」なのだそう。実際、行政サイドも、これを違法行為として取り締まるような積極的な措置は行っていない。放っておいても害があるわけではなく、一掃するにも大きなコストがかかる。休暇を *toma* で楽しむ人々の消費が、地方経済を活性化させていることも否めない。

このような *toma* のひとつが、2011年3月、日本からの遠地津波によるチリ有数の被災地となった。仮に、東北地方太平洋沖地震の発生が1ヶ月早かったら、休暇中の滞在者の中から犠牲者が出ていた可能性は高いと考える。その意味で、最悪の事態は免れたが、プエルトビエホは上述の地域的特性により、砂浜で家が流された個人に対して公的支援はなかったという。それゆえ、その後の復興は、自力再建が基本となった<sup>10</sup>。



写真②（筆者撮影：2016年2月19日）

<sup>9</sup> プエルトビエホにおいて、例外的に正式な居住許可を得ているのは漁師だけだという。確かに、津波襲来直前に、軍や警察が彼らの船を運び出す手助けをしている。また、その復興過程において、砂浜の外の少し高い位置にある彼らの住居周辺には、行政の力で新たに防災無線や避難指示標識が設置されている。

## 5. 大海を越える想像力のために

この実質10日間の調査で、チリにおける人類学的研究を標榜するつもりはない。プエルトビエホの民族誌的な記述を本研究の中心に据えたねらいは、別のところにある。それは、2011年3月11日に発生した津波に関して、太平洋の対岸の被災地のディティールを描くことで、翻って「東日本大震災」という言葉で語られてきた災害を捉え直すことである。

その作業のために、筆者を含む現代人の海に対する想像力を問うことから始めたい。ウィリアム・ジェイムズは、「われわれは、海を目にするたびに受ける印象を心の中で増殖させるによって、大海を一つの全体として考えるのである」と述べた [James 1952: 584]。遠地津波は、まさにこの想像の通りに実際の海がひと続きであるからこそ対岸まで到達する。しかし、視界を超えてなお広がる海を、繰り返し思い浮かべていくうちに、ある別のイメージが形を成してくる。世界を俯瞰的に表す地図である。

関連して、社会学者の若林幹夫は、『地図の想像力』において、地図を通じた空間認識は、製作した人間の集団が直接知る領域を越えて拡張され、想像的な概念やイメージで分節化され、構造化されたものであることを指摘した [若林 2009: 100]。国別に色分けされたメルカトル式世界地図は、我々にとって馴染み深い例だといえる。その平面上で、海は通常、明確に区切られた国と国の間にある水色の空白として表現される。そして、歴史家の網野善彦は、その海を、明治以降の日本政府が、国民国家形成の過程で、人と人をつなぐものではなく、人と人を隔てるもの、として教え込んできたという [網野 2000: 34~36]。こうした世界像は、「東日本大震災」の認識においても、部分的な制約をもたらしていたと考える。

自然現象としての地震や津波は、それが人間に被害を及ぼすとともに、ナショナルなものへと転じ得る。三陸地方の郷土史を専門とする川島秀一は、今回の震災発生後、沿岸部の被災地を応援する声が、じきに「がんばれ宮城」や「がんばれ岩手」となり、それが「がんばれ東北」に広がり、最後は「がんばれニッポン」になっていたことへの違和感を表している [川島 2013: 247]。また、この震災の名称も、初期の「東北関東大震災」から、2011年4月1日に政府の命名で「東日本大震災」に統一された。実際、この大規模自然災害は、国家を揺るがす有事であり、国民が力を合わせて乗り切らなければならない事態であったことは間違いない。

しかし、その脅威が自国だけのものだと思ひ込むことは、国外の他者との連帯の機会を損ないかねない。事実、気象庁の報告によると、2m以上の津波は、本研究で注目したチリだけでなく、アメリカ合衆国とエクアドルにも襲来している。この他にも、メキシコやパプアニューギニアでも1m~2mの津波が観測され、20cm~1mの津波ならば、環太平洋のほぼ全域に及ぶ [気象庁 2011: 7]。

世界各地にフィールドをもつ日本の人類学者も、3・11以降、この津波のトランスナショナルな側面には十分な意識が届いてなかったといえる。振り返ってみると、その被災地への関与の仕方は、大きく分けて2つあった。ひとつは、自らこれまで培ってきたフィールドワークの手法を活かし、実際に東北の被災地で様々な調査が行われたことである [竹沢 2013、林・川口 2013、高倉・滝澤 2014]。そして、もうひとつは、例えば、他国で発生した災害とその復興の事例や、死生観の文化的多様性など、この難局を克服するための知見を提示したことである [上田 2011、木村 2012、川田 2013、山形 2013、市野澤 2015、清水 2015、鈴木 2016]。

ひとつひとつの研究が示唆に富み、ここでそれらを詳細に取り上げることはできない。しかし、いずれにも共通していたのが、この大規模自然災害が日本のものだ、という強固な前提である。筆者自身も、震災発生以降、まずは支援者として南三陸町の人々と関わり始め、その前提を疑問視することがないまま数年間、調査研究を続けていた [内尾 2013]。

そして、震災発生から5年以上が過ぎ、被災地への国内の関心は薄れつつある。一時は日本社会の力を結集するための動機付けとなったナショナルなものも、形骸化しつつある。「東日本大震災」という災害が、国内でそのまま過去の出来事になってしまうならば、これまで見過ごしていた他者とのつながりを模索することは意義のあることのように思える。少なくとも、チリとの結びつきを強めることは、復興後の南三陸町の地域的特性を際立たせる意味で有益となるだろう。そのためには、一旦、震災発生当時まで遡って、「東日本大震災」という言葉を脱構築してみる必要があると考える。

ジャック・デリダは、言葉とそれを指し示す対象の不安定な関係に着目し、脱構築を「ある概念から他の概念へと移動することではなく、何らかの概念の秩序を、それを分節化している秩序とともに逆転させ、その位置をずらすこと」という意味で用いた。そして、古い名に、新しいエクリチュール（書かれる言葉）の

<sup>10</sup> アタカマ州知事ヒメナ・マタスは、2011年3月12日、メディア取材に対して、犠牲者がいなかったことを述べた上で、「復興というよりもその地域の違法性を問わなければならない」とコメントを締めくくっている [Cooperativa. cl 2011]。

概念を接ぎ木させておくことが、「すでに構成されている歴史的領野に効果的な介入」となり、その作業において、「危殆に瀕するすべてのものに、互いに交流する機会と力と能力とを与える」と予見した [Derrida 1982 : 329, 330]<sup>11</sup>。また、デリダの脱構築に関する詳細な解説を手がけたジョナサン・カラーは、『ディコンストラクション』において、広義の脱構築がテキスト分析だけでなく、ポストコロニアル研究やジェンダー研究などにも活用されていることを踏まえつつ、その重要性について以下のように述べる。

一見周縁的なものに注意を集中することによって、補遺の論理が解釈のための戦略として働きはじめる。これまでの解釈者が周縁に追いやったり除外していたものが、それが除外されることになったまさにその理由のために、重要であるかも知れないということになるのである。[カラー 2009 : 228]

まさに、チリの被災地は、「東日本大震災」の解釈における補遺の論理を支えているといえる。実際、2011年3月11日に発生した大津波の物理的な被害を、筆者以外の「日本人」を全く登場させないままに記述することは可能であった。プエルトビエホの人々の経験を詳らかにしたことで、我々は、件の大津波の被災圏と、「東日本大震災」の被災地の不一致を、具体的に思い浮かべることができる。また、それと並行して、これまで想像力を規制してきた、災害のナショナリティの発生源を遡及的に追跡し、相対化することも可能となる。その先には、酒井直樹が『ナショナリティの脱構築』の序文で強調しているように、人種や民族、国民といった範疇に支配されない社会関係がいくらでもあり [酒井 1996 : 47]、テッサ・モーリス＝スズキが『批判的想像力のために』で希望を託しているように、「日本」という枠組みを問い直すことで、我々の空間的視野にも変化がもたらされるのである [モーリス＝スズキ 2002 : 35]。

そろそろ本研究の締めくくりに入りたい。かつてチャールズ・ライト・ミルズは、ミクロな個人がマクロな社会との結びつきを通じて自己分析するための手立てを、「社会学的想像力」と呼んだ [ミルズ 1965]。「東日本大震災」の被災者もその周囲の目撃者も、メディアを通じて報道される様々な被災地の映像や統計的事実を知ることによって、自らの体験を大局の中に位置付けてきたといえる。しかし、その際に発揮された想

像力は、これまでほぼ、ナショナルな次元に絡めとられていた。それは、地球規模にまで拡張されることもあったが、「被災した我が国」と「支援してくれた諸外国」という構造を保持していた。そして、プエルトビエホのような、この二項対立で捉えることのできない災害の多様な現実が捨象される傾向にあった。モアイが寄贈された経緯をよく知る南三陸町の人々ですら、そのほとんどはまだチリの被災地の存在を知らない。

この現状に鑑み、さらなる検討を要しているのは、ミクロな個人をマクロな社会に位置付ける想像力を補う思考である。関連して、山下晋司は、第5回日本文学人類学会受賞記念論文において、マーガレット・ミードの *Learning to Live Together in One World*（ひとつの世界とともに生きることを学ぶ）という未出版に終わった本のタイトルに言及しながら、その問題意識を引き継ぐ形で「人類学的想像力」について論じている [山下 2010 : 340]。本研究において練られたそれは、ミクロな個人が、構造化された歴史的な世界観から離れ、別のミクロな個人の意識に接続するような共時的な想像力をいう<sup>12</sup>。

そのために、筆者は、プエルトビエホの人々にチリ地震津波も含めて南三陸町のことを説明したように、調査からの帰国後は、同町の知人にプエルトビエホのことを少しずつだが伝えるようにしている。こうした取り組みが、大海を越えたところにいる他者とつながる想像力をもたらすとすれば、それは新たな「水平」を開く学問の貢献となりはしないだろうか。

#### 参考文献・ウェブサイト

- Atwater, Brian F., Satoko Musumi-Rokkaku, Kenji Satake, Yoshinobu Tsuji, Kazue Ueda, and David K. Yamaguchi (2005) *The Orphan Tsunami of 1700: Japanese Clues to a Parent Earthquake in North America [Second edition]*. Reston, Virginia : United States Geological Survey in association with Seattle and London : University of Washington Press.
- Arredondo, Ana Maria (2013) *Un Moai Para Japón*. Isla de Pascua : Editorial Aukara.
- Babidge, Sally (2016) Contested value and an ethics of resources : Water, mining and indigenous people in the Atacama Desert, Chile. *The Australian Journal of Anthropology*, 27 : 84-103.

<sup>11</sup> 直接引用箇所の日本語訳は、続いて参考にするジョナサン・カラーの『ディコンストラクション』の訳者である富山太佳夫、折島正司によるもの。なお、参考文献リストには、筆者がそれらと照合するために用いた英語版を挙げている。

<sup>12</sup> そのための研究方法としては、ジョージ・マーカスが提唱した「マルチサイトッド・エスノグラフィ」のような、複数の現場で実施する質的研究の統合を通じて、ひとつの出来事を多様な当事者の視点から描き出していくことが有効だと考える [Marcus 1995]。

- Cooperativa. cl (2011) *Marejada destruyó 150 casas en Puerto Viejo* (Big wave destroyed 150 houses in Puerto Viejo) [http://www.cooperativa.cl/marejada-destruyo-150-casas-en-puerto-viejo/prontus\\_notas/2011-03-12/182213.html](http://www.cooperativa.cl/marejada-destruyo-150-casas-en-puerto-viejo/prontus_notas/2011-03-12/182213.html) (2016年12月18日閲覧)。
- Derrida, Jacques (1982) *Margins of Philosophy*. Chicago: University of Chicago Press.
- Dorfman, Ariel (2004) *Desert Memories: Journeys Through the Chilean North*. Washington, D. C.: National Geographic.
- Housner, George W. (1963) An Engineering Report on The Chilean Earthquakes of May 1960. *Bulletin of the Seismological Society of America*, 53 (2): 219-223.
- James, William (1952) *The Principles of Psychology*. Chicago: Encyclopedia Britannica.
- Marcus, George E. (1995) Ethnography in/of the World System: The Emergence of Multi-Sited Ethnography. *Annual Review of Anthropology*, 24: 95-117.
- USGS (2012) Chile 1960 May 2219:11:14 UTC Magnitude 9.5: The Largest Earthquake in the World. [http://earthquake.usgs.gov/earthquakes/world/events/1960\\_05\\_22.php](http://earthquake.usgs.gov/earthquakes/world/events/1960_05_22.php) (2016年12月18日閲覧)。
- 朝日新聞 (2012)「ピネェラ・チリ大統領、志津川高を訪問：モアイの絆、『新しい像贈る』約束」(2012年3月31日掲載)。
- 網野善彦 (2008)『「日本」とは何か日本の歴史00』講談社。
- 市野澤潤平 (2015)「プーケットにおける原形復旧の10年：津波を忘却した楽園観光地」『新しい人間、新しい社会：復興の物語を再創造する』清水展，木村周平 (編)，161-193，京都大学出版会。
- 上田紀行 (2011)『慈悲の怒り：震災後を生きる心のマネジメント』朝日新聞出版。
- 歌津町 (1986)『歌津町史』歌津町。
- 内尾太一 (2013)「東日本大震災の公共人類学事始：宮城県三陸地方における被災地支援の現場から」『文化人類学』78 (1): 99-110。
- 運輸省第二湾岸建設局 (1978)『三陸沿岸の津波対策』運輸省第二港湾建設局横浜調査設計事務所。
- 外務省 (2012)「諸外国等からの物資支援・寄付金一覧」<http://www.mofa.go.jp/mofaj/saigai/pdfs/bussisien.pdf> (2016年12月18日閲覧)。
- 外務省 (2014)『外交青書2014』外務省。
- 河北新報 (2010)「惨事に思いはせ訓練：チリ地震津波50年住民ら5000人参加」(2010年5月25日掲載)。
- カラー，ジョナサン (2009)『新版ディコンストラクション I』富山太佳夫，折島正司 (訳)，岩波書店。
- 川田順造 (2013)『富士山と三味線：文化とは何か』青土社。
- 気象庁 (2011)「特集1平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」<http://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/hakusho/2011/HN2011sp1.pdf> (2016年12月18日閲覧)。
- 気象庁 (2016)「震度・マグニチュード，その他」<http://www.jma.go.jp/jma/kishou/knownow/faq/faq27.html#25> (2016年12月18日閲覧)。
- 木村周平 (2012)『震災の公共人類学：揺れとともに生きるトルコの人びと』世界思想社。
- 国際交流基金 (2013)「南三陸—チリはるかな友に心寄せてチリ大地震の被災地と宮城県南三陸町の高校生が太平洋の向こうの友人に詩と歌のプレゼントを贈ります」<https://www.jpf.go.jp/j/project/culture/archive/information/1301/01-07.html> (2016年12月18日閲覧)。
- 酒井直樹 (1996)「序論：ナショナリティと母(国)語の政治」『ナショナリティの脱構築』酒井直樹，ブレット・ド・バリー，伊豫谷登士翁 (編)，9-53，柏書房。
- 志津川町 (1989)『自然の輝：志津川町誌 I』志津川町。
- 志津川町 (1990)『志津川町チリ地震津波災害30周年記念誌』志津川町。
- 清水展 (2015)「先住民アエタの誕生と脱米軍基地の実現」『新しい人間，新しい社会：復興の物語を再創造する』清水展，木村周平 (編)，17-50，京都大学出版会。
- 鈴木佑記 (2016)『現代の<漂海民>：津波後を生きる海民モーケンの民族誌』めこん。
- 高倉浩樹，滝澤克彦 (編) (2014)『無形民俗文化財か？被災するということ：東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』新泉社。
- 竹沢尚一郎 (2013)『被災後を生きる：吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』中央公論新社。
- 名波正晴 (2011)『検証・チリ鉱山の69日，33人の生還：その深層が問うもの』平凡社。
- 林勲男，川口幸大 (編) (2013)「<特集>災害と人類学：東日本大震災にいかに向き合うか」『文化人類学』78 (1)。
- 広野卓蔵 (1961)「チリ地震について」東京地学協会『地学雑誌』70 (3)，122-133。
- 細野昭雄 (2010)『南米チリをサケ輸出大国に変えた日本人たち：ゼロから産業を創出した国際協力の記録』ダイヤモンド社。
- 南三陸町 (2012)「南三陸町復興計画：絆未来への架け

- 橋」<http://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/6,303,c,html/303/fukkoukeikaku120326.pdf>（2016年12月18日閲覧）。
- 宮城県（2015）「東日本大震災における被害等状況平成27年7月31日現在」<http://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/321498.pdf>（2016年12月18日閲覧）。
- ミルズ, チャールズ・ライト(1965)『社会学的想像力』鈴木広（訳）, 紀伊国屋書店。
- モアイプロジェクト実行委員会（2013）『モアイの絆：チリ・イースター島から南三陸町への贈り物』言視社。
- モーリス＝スズキ, テッサ（2002）『批判的想像力のために：グローバル化時代の日本』平凡社。
- 山形孝夫（2013）『黒い海の記憶：いま、死者の語りを聞くこと』岩波書店。
- 山下晋司（2010）「2050年の日本：フィリピーナの夢をめぐる人類学的想像力」『文化人類学』75（3）：327-346。
- 若林幹夫（2009）『増補地図の想像力』河出書房新社。